中国語話者のための日本語教育研究会主催特別講演会（2017.7.1）

日本語教育文法から見た「ている」と「ていた」

一橋大学国際教育センター教授　庵　功雄
isaoiori@courante.plala.or.jp
http://www12.plala.or.jp/isaoiori/

１．はじめに

テイル形は日本語のアスペクト研究の中心的な研究対象として、これまで数多く研究されてきており、論点は出尽くしているかのように見える。日本語母語話者を対象とする日本語記述文法（日本語学）としてはそうかもしれない。しかし、日本語学習者に対する説明（日本語教育文法[1]）としてはまだまだ不十分な点が多分にある[2]。これを受け、本発表では、学習者がテイル形、テイタ形を適切に「産出」できるための規則を考える。

２．テイル形の用法

本発表では、庵・清水（2016）にしたがい、テイル形に以下の 7 つの用法を認める。

（1）a. 進行中

例．雨が降っている。

b. 結果残存

例．ドアが閉まっている。

c. 繰り返し

例．私は毎日 6 時に起きている。

d. 経験・記録

例．夏目漱石は 1867 年に生まれている。

e. 完了

例．会場に着いたとき、コンサートは始まっていた。

f. 反事実

例．あのときお金があったら、あのカメラを買っていた。

g. 単なる状態

例．その鉛筆はとがっている。

３．「ている」の研究史

テイル形、テイタ形に関するとらえ方の研究史を非常に大づかみにとらえると、まず、金田一(1950)が立てた動詞の 4 分類がある。

---

[1] 日本語記述文法（日本語学）と日本語教育文法の関係については、庵（2011, 2013）参照。
[2] 例えば、非母語話者の修士論文、博士論文、投稿論文などを添削していて、最も誤りが多いのはテイル形、テイタ形である。これは、超級レベルの学習者にとっても、テイル形、テイタ形を正しく「産出」することが容易ではないことを示している（cf. 高梨ほか2017）。

（2）a. 状態動詞（テイル形が存在しない）

b. 継続動詞（テイル形の解釈が進行中になる）

c. 瞬間動詞（テイル形の解釈が結果残存になる）

d. 第四種の動詞（テイル形でしか使われない）

「時間」を基準としたこの金田一分類を批判して、パラダイム転換を行ったのが奥田(1977)であり、その考え方を大まかにとらえると次のようになる[3]。

（3）a. 状態動詞（アスペクト対立がない）

b. 非（主体）変化動詞（テイル形の解釈は進行中になる）

c. （主体）変化動詞（テイル形の解釈は基本的には結果残存になる）

ここで、テイル形の解釈の基準軸が「時間」から「変化」に転換された。この奥田(1977)の枠組みは高橋(1985)などを経て、工藤(1995)である種の完成を見る。

工藤(1995)ではテイル形、テイタ形は単なるアスペクト形式ではなく、テンスとアスペクトの複合体であることが明示的に指摘されている。これを表示すると、次のようになる。

表 1　テンスとアスペクトの関係（工藤 1995）

		アスペクト	
		完成相（perfective）	未完成相（imperfective）
テンス	非過去（non-past）	ル形（－φ－ru）	テイル形（－tei－ru）
	過去（past）	タ形（－φ－ta）	テイタ形（－tei－ta）

この工藤(1995)のとらえ方は現在の日本語学におけるアスペクト研究の一応の共通理解と見ることができる[4]（cf. 金水 2000）。

４．日本語教育文法から見た「ている」「ていた」

本発表では、日本語教育文法（＝産出のための文法）という観点から「ている」と「ていた」について、進行中と結果残存を中心に取り上げる。

4.1　「ている」の用法（基本用法と派生用法）

「ている」には基本用法と派生用法があるとされる。基本用法である進行中と結果残存については、どちらの意味になるかが動詞の特徴から規定できるのに対し、その他の派生用法ではそれができないというのが両者の違いである。

4.2　基本用法と動詞のタイプ

基本用法の場合、動詞のタイプからテイル形の用法が規定できる。ここで、(3) から重

[3] これは奥田（1977）の基本的な考え方を伝えるためのもので、用語は発表者のものである。
[4] 工藤（1995）とは一線を画する立場からの重要な研究に森山（1988）がある。

要なのは変化動詞か非変化動詞かである。これについては、次のテストフレームが使える（cf. Vendler1967、三原 1997、金水 2000）。

（4）a. 「期間＋φ」と共起でき、「期間＋で」と共起できなければ、非変化動詞

b. 「期間＋φ」と共起できず、「期間＋で」と共起できれば、変化動詞

例えば、次のようになる。

（5）a. 太郎は｛1 時間／#1 時間で｝走った。（「走る」は非変化動詞）[5]

b. 氷は｛*1 時間／1 時間で｝溶けた。（「溶ける」は変化動詞）

4.3　進行中

派生用法のうち、特定の時間に位置づけられない繰り返しと単なる状態を除くと、この 2 用法の違いは、「ている／ていた」に含まれる「る／た」の機能の違いに由来する（庵 2014）。

基本用法（進行中、結果残存）の場合、「ル／タ」は「観察時」を表す。

まず、進行中のうち、「観察時」が現在の場合を考える。この場合は次のようになるが、これは、「発話時」という「観察時」において、「雨が降る」という出来事が観察可能であるということである。

（4）あっ、雨が降っている。

これは、言い換えると、進行中のテイル形の場合、発話時（＝「観察時」）に発話者の「視点」があるということである。

次に、進行中のうち、テイタ形の場合を考える。この場合は、次のようになるが、これは、「会社を出るとき」という「観察時」において、「雨が降る」という出来事が観察可能であるということである。つまり、(9)は(8)を「平行移動」したものである。

（5）会社を出るとき、雨が降っていた。

これは、言い換えると、進行中のテイタ形の場合、「観察時」（＝過去の 1 時点）に発話者の「視点」があるということである。ここで、何かを観察できるのは「1 時点」に限られるので、テイタ形の場合、「観察時」は「1 時点」を表すものでなければならない。

このことから、次の（6）のような文は厳密には適格性が落ちることがわかる。なぜなら、「昨日」は「1 時点」ではないからである。(6) のような文が許容されるのは、解釈者が「昨

[5] 「1時間で走る」が適格になるのは、予め全体量が決まっている場合である（ex. 太郎は10キロを1時間で走った）。この場合「走る」はVendler（1967）の言う活動動詞（activity）ではなく、（動詞句レベルで）達成動詞（accomplishment）になると考えられる（cf. 森山1988）。なお、こうした意味で、このテストフレームは実際には「限界性（telicity）」の有無を測るものであると言える。

日」の「1 時点」を想定して、その時点を読み込んで解釈しているためであると考えられる。

（6）？昨日、雨が降っていた。（cf. ok 昨日、雨が降った。）

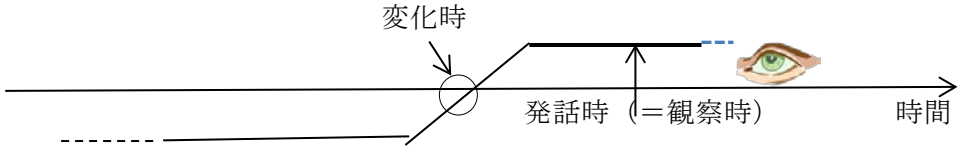
一方、タ形の文が問題なく許容されることから、タ形の場合は、「視点」が「観察時」に移動する必要はないことがわかる。

4.4　結果残存

結果残存の場合は、進行中よりやや複雑である。

まず、（7）からもわかるように、「変化動詞」には状態が変化したとき（「変化時」）が存在する。テイル形の場合、「変化時」は発話時以前であり、かつ、変化後の状態が発話時において観察可能でなければならない。この点を図示すると、次のようになる。

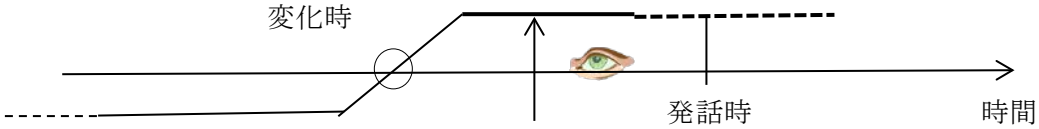
（7）あっ、コップが割れている。



これは、言い換えると、結果残存のテイル形の場合、発話時（＝「観察時」）に発話者の「視点」があるということである。

結果残存のテイタ形の場合は、進行中と同じく「観察時」が過去の「1 時点」に移動する。これを図示すると次のようになる。（8）は（7）を「平行移動」したものである。なお、変化の結果の状態は観察時に「結果として」継続していてもよいが、継続していることが明示的にわかっている場合はテイタ形は使えず、（9）のようなテイル形が使われる。

（8）私が部屋に入ったとき、コップが割れていた。



私が部屋に入ったとき（＝観察時）

（9）私が部屋に入ったときから、コップは割れている。[6]

これは、言い換えると、結果残存のテイタ形の場合「観察時」（＝過去の 1 時点）に発話者の「視点」があるということである。そして、進行中のテイタ形と同様、「観察時」（「1 時点」）を表す（（8）の「私が部屋に入ったとき」に当たる）成分は文中で特定されなければならず、それが指す時点と文末の「た」が指す時点は同一である必要がある。

なお、移動を表す動詞（位置変化動詞）の場合、テイル形は終点への移動後の存在を表

---

[6] （7）～（9）は英語にすると全て形が異なることがわかる。

（7）あっ、コップが割れている。　A glass is broken.

（8）私が部屋に入ったとき、コップが割れていた。　A glass was broken when I entered the room.

（9）私が部屋に入ったときから、コップは割れている。
The glass has been broken since I entered the room.

し、そこへの移動の過程を表すことはできない。

（10）太郎は大阪に行っている。（＝太郎は大阪に行った＋大阪にいる）

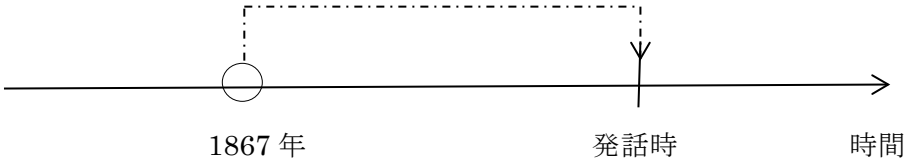
Cf.（11）Taro is going to Osaka.

4.5　経験・記録（パーフェクト）

経験・記録は過去の出来事を発話時に結びつけるものである。例えば、（12）で「ーていー」が使われるのは（13）の図式において出来事が起こった時点と発話時が結びつけられているためである（この用法のテイル形については井上（2001）も参照）。この場合、矢印の方向が発話時に向かっていることに注意されたい。

（12）夏目漱石は 1867 年に生まれている。（経験・記録）

（13）



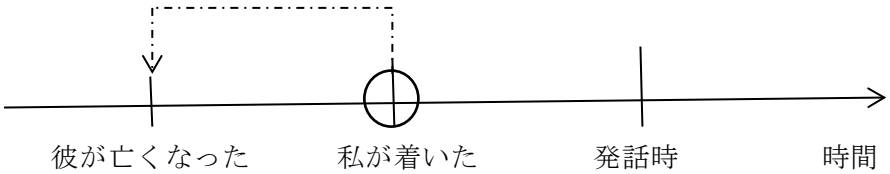
4.6　完了

ここまでは、明示的に「観察時」が存在するか、少なくとも、出来事が発話時に結びつけられていたが、完了はそれとは大きく異なる。まず、この場合のテイル形／テイタ形における「る／た」は（「進行中／結果残存」の場合とは異なり）文中の時間成分と呼応していない（主節の「た」が従属節が表す時間（時点）と呼応するのは（15）であって（14）ではない）。つまり、（14）の主節の「た」は「観察時」ではなく、「基準時」として機能している。これは（14）の図示である（16）からもわかる。つまり、この場合、（経験・記録とは異なり）矢印の方向が基準時に向かうのではなく、基準時から離れていくのである。

（14）私が着いたとき、彼は亡くなっていた。（完了）

（15）私が着いたとき、彼は亡くなった。

（16）



なお、このことに基づくと、（17）（18）のような反事実の場合に「ている／ていた」が使われる理由も説明できるが、時間の関係で詳細は割愛する（cf. 庵 2014、Iori 2014）。

（17）今お金があったら、あのカメラを買っている。

（18）あのときお金があったら、あのカメラを買っていた。

５．使い分けが問題となる場合

ここでは、使い分けが問題となる主な場合を 2 つ取り上げる。

5.1　「ている」と「た」—結果残存—

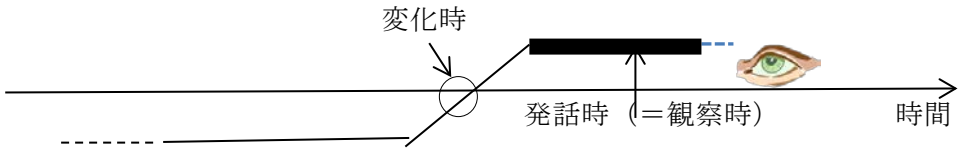
最初に問題となるのは結果残存の「ている」と「た」で、次のような誤用がある。

（19）（部屋に入ったときの発話）

a. あっ、コップが割れている。

b. #あっ、コップが割れた。

これは、次の図で、日本語では通常、太線部を捉えなければならないのに対し、中国語などでは変化時を捉えるためであると考えられる。



変化動詞でも、変化を見たときにはタ形を使う必要がある。

（20）（前の人がハンカチを落としたのを見た）もしもし、ハンカチが落ちましたよ。

（21）あっ、ハンカチが落ちている。

なお、変化動詞のうち、変化の結果が「存在」になるタイプにおいては、テイル形の代わりに「ある」を使う誤用が見られる（cf. 陳 2009、トッフォリ 2017）。

（22）（路上に財布が存在するのを発見したとき）

a. あっ、財布が落ちて（い）る。

b. #あっ、財布がある。

5.2　「ていた」と「た」—進行中—

次に問題になるのは進行中の「ていた」と「た」で、例えば、次のような誤用がある。

（23）寺山［修司］（1972）は随筆集『家出のすすめ』の「お母さんの死体の始末」一章で「つよい青年になるためには母親から精神の離乳なしでは、ほかのどのような連帯も得られることはないでしょう（p.15）」と強く訴えていた（→訴えた）。「若者は独り立ちできる自身がついたら、まず『親を捨て』ましょう」という寺山の主張に筆者も深く感銘を受けていた（→受けた）。

これは、発表者が指導したレポートの例である。このレポートは完成度が高く、ほとんど文法的な間違いはなかったのだが、この下線部のテイタ形はタ形の方が自然である。それは、テイタ形は「直接経験」したものでなければならないためである。このように、テイタ形とタ形の違いは「時間の長さ」の違いとは無関係である。

６．まとめ

本発表では、（母語を特定しない）日本語教育文法の立場から、テイル形、テイタ形にかかわる問題点のうち、進行中と結果残存にかかわるものを中心に見た。本発表で取り上げた観点を学習者に提示する具体的な方法については庵・清水（2016）を参照されたい。

参考文献（引用文献以外を含む）

庵　功雄（2010）「第 1 回アスペクトをめぐって」『中国語話者のための日本語教育研究』創刊号、日中言語文化出版社

庵　功雄（2011）「日本語記述文法と日本語教育文法」森篤嗣・庵功雄編『日本語教育文法のための多様なアプローチ』ひつじ書房

庵　功雄（2013）『日本語教育、日本語学の「次の一手」』くろしお出版

庵　功雄（2014）「テイル形、テイタ形の意味・用法の形態・統語論的記述の試み」『日本語文法学会第 15 回大会予稿集』

庵　功雄（2017）『一歩進んだ日本語文法の教え方 1 』くろしお出版

庵　功雄・清水佳子（2016）『上級日本語文法演習 時間を表す表現（改訂版）』スリーエーネットワーク

稲垣俊史（2013）「テイル形の二面性と中国語話者によるテイル形の習得への示唆」『中国語話者のための日本語教育研究』4、日中言語文化出版社

井上　優（2001）「現代日本語の「タ」」『「た」の言語学』ひつじ書房

奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって―金田一段階―」奥田靖雄（1985）『ことばの研究・序説』むぎ書房に再録

金水　敏（2000）「1 時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法 2　時・否定ととりたて』岩波書店

金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」金田一春彦編（1976）『日本語のアスペクト』むぎ書房に再録

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房

高梨信乃・斎藤美穂・朴　秀娟・太田陽子・庵　功雄（2017）「上級日本語学習に見られる文法の問題―修士論文の草稿を例に―」『阪大日本語研究』29、大阪大学

高橋太郎（1985）『日本語のテンスとアスペクト』秀英出版

張　麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析』スリーエーネットワーク

陳　昭心（2009）「「ある／いる」の「類義表現」としての「結果の状態のテイル」―日本語母語話者と中国語を母語とする学習者の使用傾向を見て」『世界の日本語教育』19

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版

トッフォリ・ジュリア（2017）「ブラジル・ポルトガル語を母語とする日本語学習者の結果残存のテイルの使用傾向に関する一考察」2016 年度一橋大学言語社会研究科修士論文

三原健一（1997）「動詞のアスペクト構造」鷲尾龍一・三原健一『日英語比較選書 7　ヴォイスとアスペクト』研究社出版

森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院

Iori, Isao（2014）”Notes on the subjunctive mood in modern Japanese”, *Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences*. 一橋大学

Vendler,Z.（1967）*Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.